

茶成葉の形態に関する研究 (第3報)

— 中国祁門種の成葉の外部形態について —

譚 非 元*・鮫 島 齊*

SANAI, H. & SAMESHIMA, H. Morphological studies on the mature leaves of Tea plants.
— Observation on Chimong tea plant (Chinese var.) —

われわれは第 1 報において中国福建省・広東省を原産地とする台湾在来種 50 品種の成葉の外部形態について述べ、第 2 報において各種茶樹の成葉の内部形態を調査し 2・3 の茶樹の素性について報告した。本報においては第 1 報と同じねらいのもとに、中国安徽省より招来した祁門種 (Chimong) の成葉の外部形態について報告する。安徽省の茶は古くより支那茶の中樞をなし、いわゆる祁門紅茶は祁門県・至徳県及び江西省浮梁県を産地とし、祁門がその中心にして世界的著名の優良紅茶であり、また南徽州一帯は徽州緑茶の産地として有名である。

供試材料は宮崎県農業試験場川南分場において昭和 12 年中 国安徽省祁門県程村昌附近より蒐集した種子として、茶業組合中央会議所より分譲を受け、昭和 14 年より育種材料樹として調査を始め、初期には紅茶用、戦後には釜炒茶用を目標として選抜した 102 系統中の特徴ある 23 系統である。調査方法は第 1 報に準拠し、葉の大きさ・葉型・葉面を測定算出し、各形態の相互関係を考察した。

祁門種の成葉の特徴を要約すると次の通りである。

(1) 葉の大きさはアッサム種・臯盧種より小さく、日本在来種より大きく、台湾在来種と大差なく、平均 $21.3 \pm 0.24 \text{cm}^2$ である。

(2) 葉長はアッサム種・臯盧種より小さいが、日本在来種に比し大きく、台湾在来種と大差なく平均 $8.85 \pm 0.05 \text{cm}$ である。

(3) 葉巾は葉長と等しく、日本在来種より大きく、台湾在来種と同じく平均 $3.38 \pm 0.02 \text{cm}$ である。

(4) 葉形指数 (葉長/葉巾) は平均 2.64 ± 0.009 で台湾在来種と大差なく、並葉・長葉が多く丸葉は少ない。

(5) 最広部位の葉長に対する割合は平均 $51.2 \pm 0.19\%$ で楕円形が多く、卵形は少なく、倒卵形は認められない。台湾在来種・日本在来種と著しい差異がある。

(6) 葉身反転の割合は台湾在来種・日本在来種より小さく、臯盧種と同じく、アッサム種よりやや大きく平均 $3.94 \pm 0.12\%$ で、概して反転の割合は少ない方である。

(7) 縁辺屈曲の割合は台湾在来種より著しく小さく、日本在来種に近く、平均 $6.52 \pm 0.22\%$ である。葉身反転・縁辺屈曲の割合の大きい事が台湾在来種の特徴であるが、この点祁門種は著しく異なる。

(8) 側脈角は台湾在来種より広いが、臯盧種・日本在来種より狭く、ほぼこれらの中間を占め、アッサム種と同じで平均 64.4 ± 0.22 度である。

(9) 側脈数は 11.4 ± 0.05 で台湾在来種より多く、アッサム種・臯盧種より少なく、日本在来種に等しい。

(10) 鋸歯数は 37.5 ± 0.8 で、アッサム種より少ないが日本在来種より多く、また台湾在来種・臯盧種よりも多い。

(11) 祁門種には早生・大葉の樞樹種、中生・小葉の栗漆種、晩生・長葉の柳樹種の 3 種があると報告されているが、本調査系統の大半は樞樹種に属し、柳樹種・栗漆種に類するは僅少であつた。これは恐らく育種操作の結果によるものと推察する。

*九州農業試験場

*宮崎県農業試験場